

して、國語の音聲を分析して五十に區別し、如何なる言葉もこの五十の音聲を寫す符號さえ知れば、自由自在に寫し得ることになりましたのは、誠に著しい進歩といわねばなりません。漢字にもとづいて新たに自己の文字を作り出した民族は他にもないわけではなく、例えば契丹（遼）、女眞（金）、黨項（西夏）など、みな同じようにそれぞれ文字を漢字に倣つて作つたのでありますが、これらはそのいずれもが、漢字よりも一層複雑で不便なものを作つたにすぎないのであります。もとより假名文字の優秀に比し得べきものではありません。尤も、五十の假名文字で國語を寫すという考えは、唐に留學した人々が修得した梵語の知識に負うところが多大であることは疑ありませんが、それにしても、かかる知識によつてかかる成果を擧げた功績は稱揚されなければならぬことであります。

ついでに書道についても述べて見ます。元來、文字を書くこと自體が支那の人から教えられたのでありますから、當時の人々の書いた文字が唐の文字に酷似していることは當然のことです。その巧妙なことは驚くべき有様であります。光明皇后が聖武天皇の追善のためになされた寫經の今日相當數に残つておりますものについて見ましても、唐人の見事な書と區別のつきかねるまでに書かれてあるのに驚嘆を禁じ得ないのであります。しかし仔細に見ますと、この間にも、やはり争うことのできない日本人流の好み、いわゆる和臭の芽生えが見出されるのであります。この傾向がしだいに發達して、次の平安朝時代の書風を作ることになるのであります。

その他律令においても、大寶律令はその後も手を加えられて國情に副うように改められ、奈良朝時代にはまずしつくり身に合つた形になつて實施せられました。また文學や學問も、大體、唐からの移入にすぎない間にも、しだ